

# 軒昂会

軒昂会会報 第18号  
 発行者 日原 雄  
 編集者 田村千秋  
 発行日 平成15年3月  
 発行 年 3 回発行  
 http://kenkokai.tes-jp.net/

会報は年3回を予定しています。皆様の原稿お待ちしております。頂いた方にはお礼を申し上げます。原稿の送り先 秦野市渋沢 3-2-7 〒259-1322 FAX:0463-88-2967 E-Mail : c-tamura@tbb.t-com.ne.jp 田村千秋



総会後宴会に移り一年ぶりの再開に酒を酌み交わし友好を更に深めました。毎回本間会員の好意に甘え熱海の新鮮な牛の食べ放題、飲み放題で毛蟹と牛の食べ放題、飲み放題で二時間はつかの間で終わる、更に部屋にて時間の経つのも忘れ宵の口まで騒いだ方もいたようです。

古きゴルフ 小日向会員 西牧会員

会社の現況について 本間会員

IT講習会にお世話して

議題「私のその後」について次の方々に興味あるお話を頂きました。このテーマは好評ですので当分続けたいと思います。

尚、監査は野呂監査役にお願ひし、総会で承認されました。

総会補填費	二万六千八百八円
会議費	二千九百九十二円
IT接続費	二万五千〇〇円
会報作成費	三万一千九百一十七円
通信費	一万九千五百八十〇円
印刷	一万
プリンタ修理	六千五百二十六円
計	十一万八千一百六十三円

前年度繰越金 五十二万 一九九円

会費・入会金 一万

支出 十一万八千一百六十三円

次年度繰越金 四十一万九千五百六十四円

十四年度支出内訳

## 平成十四年度総会 兼新年会

軒昂会総会は例年通りの順でとり行なわれました。

場所 熱海エクスプレス 時一月十九日

出席者 二十三名

会長挨拶

## 古希の酔狂、癒しのウクレレ

谷田正雄

古希、唐代の詩人杜甫の詩の一節「人生七十古来稀(命)から七十才の長寿人生体験を敬う呼称となつて久しいが昨今では平均寿命未滿の老年ビバビバの一年生程度でシブシブトにも座りかねる心境である。」人生七十路の未知への旅立ち。と決め込み大いに胸を張り、意固地な誇りを以て日々新たな楽しみを求め続け、生きる「こと」酒を飲む「こと」をこまかく愛し続けたいと念じている毎日です。

少年よ大志を抱け 古希よ誇りを抱け 平成十二年十一月以来、妻の度重なる入退院長期化のため、それまでの退職後の生きがい生活のメインであった国内海外の夫婦旅、を始め写真、絵画の旅、OBS氏とのゴルフ、軒昂会の皆様との宴会にも参加不可能になつて早二年半、その間新しい生きがいを探る折り返し、平成十三年十月地元海老名市に市民による初のウクレレクラブが誕生、毎日の介護生活の合間を生かせるひとときは、コトと創立メンバーに加わりました。その会の名も海老名ウクレレクラブ「ウアナ」。「ウアナ」とはハワイ語で大地大海を意味し熱帯中心のメンバー(私は2番目の年長)の青春の心の大地の集いであり、月一回のレッスンの時間を重ねて演奏曲目も徐々に増え、ウクレレだけでなく、唱歌、愛唱歌、叙情歌、歌謡曲、ポピュラー、ジャズ等々、トリオだけは仲々のものに成長中です。我量はさておき。

平成十四年七月、半年に亘るレッスンの成果を問う始める大舞台、海老名市文化会館ホールでの七ヶ月サートに「ランタナクラブ」レイチとの合同出演の運びとなりました。ハワイアンの名曲「カニヒラ」パリスル、赤いレイを始めて行くきた、鈴かけの道、等演奏曲は八曲、スティーブキターとシモセイダのメロディーに乗せて、弾き唄うウクレレの南国の香りが漂う素朴なリズムと音色によって半世紀前の学生時代の故郷北九州でのハワイアンバンド体験の自分史が走馬灯のごとく蘇りました。

その後市内のケアセンターでのボランティア「コンサート」出演を経て、平成十四年十一月同じく海老名市文化会館ホールで入場料五百円の有料チャリティコンサートに出演、厚木市在住の世界的な小モリ奏者、柳川優子女士とその教え子グループとの共演が出来、私の生きがいの記念の1ページとなりました。

柳川さんが五本の小モリを駆使して演奏する八分の一舞曲第四番は圧巻でした。



私達「ウアナ」は八曲の演奏でしたがウクレレ弾き唄う「ザライ」の熱唱と取りの名曲「アロハエ」の哀唱には拍手喝采、お世辞とは云えながらいもなく興奮する始末でしたが、これ七十五日は長生き出来ることでした。

昭和三十一年にアマタに職を得て以来、社業一筋に半世紀近く一度もウクレレを手にするチャンスは無く、その間にも、音楽の普及は目覚しくテレビを始め数々のメディアを通して全国津々浦々に伝わり特に「カラオケ」の誕生とその大発展をまのあたりに驚き傍観しながらも音楽や唄は自分の心で聴き、自分個性のリズムやテンポで音や唄を楽しむものと決め込んで、アチカラオケ、主義を独りよがり続けて来た人間が、七十にしてウクレレのリズムと共に音楽を愛する心と体を取り戻すことが出来るような心境になり、はたして青春の初心を忘れていなかった自分をいとおむいませ平成十五年の早春の昼下りの実感です。

古希を超える年になると、もつ人生の時の流れには逆らうことは出来ない、納得しているものの心のうちどこかに、何故か時の流れが過去に向かつて逆流し、思い出や青春の夢が蘇ってくる事がよくあると云われいます。

七十年の歳月があればこそ味わえる正に生きがいの癒しの音楽との出会いである。

平成十五年二月十五日



黒野

### 耳よりなお知らせ

軒昂会発足十周年記念行事として日帰りバスツアーを計画しています。

日時 五月二十日(火)

行先 伊豆修善寺方面

費用 個人負担三千五百円

軒昂会より二千元援助します。

### 軒昂会会員だより

軒昂会員数の動向

昭和六十五年会発足時	七十七名
最近六年間の入会者	二十五名
亡くなられた方	十名
自己都合や遠方転宅等	十一名
会費滞納で脱会した方	五名
現在の会員数	七十八名

新会員募集中です、紹介お願いします。

平成十五年度ゴルフ開催日 (予定)

第五十三回	三月二十四日 (月)
第五十四回	七月十三日 (日)
第五十五回	十月初九日(月)の予定

お願ひ

平成十四年度軒昂会年会費二千元会計までお振り込み下さい。

株式会社みずほ銀行 厚木北口支店 口座番号 三七一

軒昂会 代表者 小泉 岩根

### 「甲州街道笹子峠」越え

桜田 忠男

中央線の車窓から見える大月までの山には稜線の近くにだけ雪が残っていました。大月を過ぎてからは里にも雪が残っていて線路の両側にもかなりの雪が積もっていました。

そんな状況を見て甲州街道最大の難所を越えるのに多少不安になりました。幸い天候は快晴でしたので笹子峠への道を登れるところまで登り、雪が深く歩けなければ戻ればよいと話し合い歩行の決断をしました。

残雪の残る笹子峠に降り立ち、国道に出て歩行を開始しました。国道二十号線は登り坂となつて大きく右に曲がりながら笹子トンネルへと向かっています。雪が輝く峰から冷たい北風が吹き降りてきて二人の頬に突き刺さりなす。今日はきびしい歩行になるぞと妻につぶやいた言葉も北風の音にかき消されて妻の耳には届かなかつたようでした。

麓の最後の集落に入るとそこは北風も入り込まず日溜りのようになって暖かく、ほっとした気分になりました。その集落を過ぎると峠への道は杉や檜の人工樹林の間を上っていきます。道路は一日中日陰となつて雪がかなり深く積もっています。

里から近く工事用の車両が上ってくるのか道路には雪の跡が残り、そこには雪が無いのでそこを選んで歩きました。峠の山々には雪が白く光り峠越えに一抹の不安を感じながら坂道を登る。もちろん我々二人以外に雪の峠道を越えていこうとする旅人などはいません。つづら折に笹子峠に上っていく道路の左側に「矢立の杉」への標識があります。

旧甲州街道はここで車道と分かれて雑木林の中に入っていきます。足元の道の日陰になる部分は雪がかなり残っています。時折人間の足跡に混じって動物の足跡も残っています。林の中に日溜りがあってそこに明治天皇が小休止された跡を示す石碑が建てられています。途中雪解けの水が道路をさえぎっている場所があつて、妻が足を取られて尻餅をつき悲鳴を上げました。着替えを持ってきていなかったのので着替えるわけにもいかず歩いていくうちに乾くのを待つことにしました。

矢立の杉は大きな杉の木で根元が大きな洞となつていて人が数人入れる広さとなつています。近くに休憩用の東屋があつたのでそのベンチに腰掛けて寒さに耐えながら大月駅で買った弁当を食べました。この大きな杉の木は昔出陣する将兵たちが戦勝を祈願して杉の梢をめぐって矢を射掛けたのだと伝えられています。

この史跡となつている、大きな杉の木は現在では車道から入り込んでいてドライブでは見ることができません。旧甲州街道の往來が激しかった頃はかなり遠くから遠望できたのだと思います。そんなことを話していると道の上のほうから人声があつて男女数人のハイカーが降りてきました。ベンチを我々が占領していたせいで挨拶だけ交わして我々が登ってきた道を下っていきました。そのハイカーから峠の雪の情報を聞いたわけではありませんが、彼らが反対側から来たことは我々も峠を越えることができるかと判断でき、まずは一安心しました。

旧道の笹子トンネルは現在国道二十号線、中央高速道路、JR中央線のトンネルの上あたりに位置しています。トンネルのなかだったころの昔の峠道はこのころでもまだ残っていました。峠のトンネルは北風の通路となつていて冷たい風が我々を押し戻すほど強く吹き抜けていました。私が前を妻が後ろに続いて縦列で進んで行きましたが、とにかく風が強く息苦しくさえ感じました。トンネルを抜けた勝沼側は雪が非常に深くトンネルから一メートルの間は雪を踏みしめて歩きました。

眺望はともすればらしく、はるか前方に甲府盆地の北側の山々が銀色に輝いて見えます。道路は七曲の屈曲を繰り返しながら下っていきます。しばらく下ると下から一台の自動車が雪道を登ってきました。続いて上からも一台ゆつくと注意深く下ってきました。一匹の茶色の犬が道を避けるかのように雑木林の中に入っていくのが見えました。猟犬でしょうか、それには猟師の姿が見えないし人の気配も感じないのがふしぎでした。

自動車のエンジン音を含めて、人工的な音は一切聞こえず雑木林の上を吹きぬけていく風の音だけが聞こえます。風が通るたびに木々がゆれて梢の雪が舞い落ちてくるので風が通ったのははつきりわかる。下るにしたがって里が近づいたのでもうか、耳を澄ませると梢を吹き抜ける風の音に混じって自動車の音が聞こえるようになりまし。

両側に続いて木立が途絶えて道が大きく右に曲がったときに麓の集落が見えました。地図を確認するとそれは駒飼の集落でした。傾斜地の集落の真中を中央高速道路の高架橋が横切っているのが見えます。集落に入ると本陣跡や脇本陣跡の標識が立っています。次回は勝沼から甲府盆地を横断して葦崎までの紀行文を書こうと思ひます。

マダラの国チベットを訪ねて

一、高地で生きる 小日向 啓治

上海で乗り継ぎ四川省成都に着いたのは午後5時であった。翌朝四十人乗り位の小さな双発機でラサチベットの首都(ラサチ)に着いた。

私も高地旅行をしているので、何回か高山病は経験しているものの此処では太陽光線が強いため脱水症が加わり、今回は参った。

そのため二ヶ月程下ったツタンと云う標高二千メートルの水テルと二日ほど体を順応させることにした。

四千メートル以上の高地で、祈りの生活の中で長い歴史を背負って過酷な自然環境の中で生きていく人々を少しでも勉強しようと思つたのが今回の旅行のキッカケであった。

一般の住宅は白壁に二十五センチ幅位の黒い窓枠の扉、小高い山頂にはタルチヨ(窓文を書いた色とりどりの風呂敷位の旗)が風にたなびいている。寺を廻る周回道路ではマラ(ト)携帯用(又車)を回して、又五体投地で祈りを続ける人々。

まさに密教(生活)の万事に密着した宗教(マダラチベット仏教)が二千年もの間脈々と根付いている現実を目の当たりにした。

二、来世こそつとリツチな人生

マダラの根本理念は輪廻転生(入間の魂は死後四十九日後に現世の行為に応じた位置に生まれ変わる)である。

マダラの経典を守り、信仰心を高め、寺院僧侶(貧しき者に慈愛と施しを、又車(経典が入っている円筒回転筒)を回し五体投地(地面に腹ばいになり尺取虫の形で祈る)等などみな生まれ変わる来世への祈りです。

「自己中、金儲け人生」はチベットでは来世は豚か蛇に生まれ変わります。この事は(総図マダラ)に解り易く書いてあります。

即ち、「輪廻転生」(来世何に生まれ変わるか)は「因果応報」(前世に何をしたら)か(できる)。

死後(極楽か地獄)よりはるかに現実的で且つ厳しい教えである。「より良い来世を願う」イコール今日「只今の善行」である。

三、寺と修行僧

チベットのマダラには大別して四つの宗派がある。

それぞれ(総本山とも言う)四つの寺を回つてみた。幾つかの共通点があった。1、祭られている仏像の基本は伝道者の「パトマサンバア」。2、寺の最高指導者は活佛「タライマ」(14世「インダ」(亡命中))

3、修行僧五歳から生涯までの大勢を抱擁している(生涯僧侶)

日本も各宗派の総本山は多くの「雲水」の修行場となっている。

これは全国各地の系列寺院の後継者研修の色彩が強い。ここがチベットの修行僧のそれとは根本から違つた。

チベットにはあれだけ過酷な生活環境のなかで子供の間引き(習慣無)いある地区内(何人の人が生きていけるか)これは農耕面積と収穫量で決まる。

四千メートル以上の高地、これと言つた産業などあるわけが無い。家畜はヤクのみ(そんなに人口密度の高い数の人は生きられない)しかも宗教制約がある。

その知恵が、一夫多妻、一妻多夫などの生活習慣など、その中には子供を口減らしのために男の子は寺預け(生涯僧侶)入口は増えないにしてハラン(死を考へる)寺では餓死は無い。

寺と僧侶に施しをのサイクルとなり、即ちこれは来世につながる。こうしたことが歴史と地形的環境条件が教えてくれた生活の知恵である。

これこそマダラの基本表現であるマダラ(天地人相対バランス)そのものである。修行僧の生活は大変厳しく(バター)灯明のもとで一日八時間の経典教育、あるていどの上級になると(禪宗)の「禪問答」のような教育が行われる。寺で老僧と修行僧とのマダラ(マ)問答を見せてもらつた。

真剣勝負そのものであった。何時か彼も「問答」に立つ立派な指導僧になるであろう事を願つて、手を合わせその場をおこしました。

四、鳥葬

日本でのテレビ番組などでチベットを訪ねてなどの「チ」が放映されますが、これは(中国当局の検閲を受けたものであり)現実問題とか、独立とか、(タライマの亡命等)については一切タブーとされている。

そうした中の一つに「鳥葬」がある。鳥葬とは、「チベットの死者の書」(「バルド、トエド」)に示された転生後の後始末で、「空蝉を砕いて鳥の餌にする」作業工程である。

即ち、「魂の抜け去つた遺体を天高く鳥に運んでもらう」儀式である。従つてここでは、墓も仏壇も無い。祖先もなければ盆や彼岸も無い。

明日鳥葬があるとの情報を得て、奥の手で内緒で双眼鏡で見える場所をゲットした。

正午に行われると聞いた鳥葬なのに九時には丘の上を十数羽の禿鷲が旋回している。聞けば朝からツアン(バ)を火で焼き焦がしてその煙と太鼓

シンバルと禿鷲を事前集合させているとの事。

しばらくすると四人の請負人に担がれた白い布をかけられた遺体を岩の上置かれ作業が行われた(詳細省略)この頃には禿鷲の数は二十羽以上になつてた。

きつとどこかで生まれ変わった生が活動していることである。

五 チベットの食事

チベットでは鳥葬、水葬の関係から鶏肉、魚肉は原則として食べない。主食はツアン(小麦を炒つて粉に引いたもの)、飲み物は(バター)茶(ティモの乳で作つたバター)にお茶を混ぜたもの(ティモ)はヤクのメス。

生まれたときから死ぬまでツアン(バ)とバター(茶)だけで一生を過ごすこともいる。

この他、これに(チヤン)醸造酒(で)ねて団子にして食ふ等。

われわれ外国人にも鶏肉や魚肉は出てこない(せいせい)ヤク、羊の肉(くらい)標高三千五百メートルでは羊は育てられない。平均標高四千五百メートルのチベットを訪ねるには、まず高山病と食事に慣れることが第一、そんなことがあつても、見れば見るほど不思議(ばかり)次の機会にはもう少し踏み込んだところまで訪ねてみたい衝動にかられている。



ポタラ宮殿



鳥葬の丘

編集後記

第18号は谷田会員に原稿をお願いしてやっと紙面を埋めることが出来ました。

投稿をお願いしているのですが、集まりません。総会で輪番制をお願いすることに決まりました。

よって、第19号は小川会員と阿部会員をお願いします。

今号より定形封筒で送ります。ご了承ください。

C. Tamura

